CHACONNE
DEALERS OF FINE VIOLINES

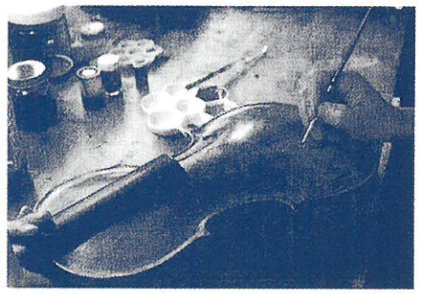
シャコンヌ～永遠の変奏

シャコンヌは、おかげさまで昨年創業25周年を迎えることができました。スタッフ一同、３０周年、５０周年へ向けて、皆様のご期待に添えますよう努力してまいります。

インターナショナルプライス
それは直輸入によって実現します

ロンドンを中心としたヨーロッパ各地でのオークションに赴き、実際に目で見て吟味したものだけを買い付けしています。また、伝統的なヴァイオリン製作の中心地、クレモナ(イタリア)の現代の名作の数々を直接オーダーし輸入しています。輸入から修復、販売までのすべてを行うことで、国際的に適正な価格を実現しています。

楽器に生命を吹き込む洗練された技術



本場ヨーロッパからのレストアラー、マエストロの招聘、伝統を誇ったHill&Sonsの技術導入などにより培ってきた技術に、当社独自の研究開発を加え総合的に優れた技術水準を確立しました。修理に使用する材料には、駒をはじめ、メープル(楓)材、スプルース(松)材まで最高のものをヨーロッパで調達しています。

㈱シャコンヌ　10：00～18：30　日曜月曜定休

名古屋店　名古屋市中区大須三丁目31-22　明治生命上前津ビル4Ｆ
0120-485-245（フリーダイヤル），　052-241-1779

金沢店　076-221-1779　東京吉祥寺店　0422-23-1879
札幌店　011-221-2561　九州小倉店　093-531-2672

The Sinfonietta 17th Concert

ザ・シンフォニエッタ 第17回演奏会

2003年10月26日(日)
午後2時30分開演(午後2時開場)
熊本県立劇場コンサートホール

主催：ザ・シンフォニエッタ、財団法人 日本交響楽振興財団
後援：日本自転車振興会(KEIRIN)、熊本市、熊本市教育委員会、NHK熊本放送局、RKK、FMK、熊本日日新聞社

KEIRIN この演奏会は、競輪公益資金の補助を受けて開催します。

Program

●ディーリアス
「楽園への道」（歌劇「村のロメオとジュリエット」より）
（約10分）

●ウォルトン
ヴィオラ協奏曲
（約25分）

―― 休　憩 ――

●ベートーヴェン
交響曲第5番　ハ短調作品67
（約40分）

指　揮：藤崎　凡
管弦楽：ザ・シンフォニエッタ

ごあいさつ

本日は、私共ザ・シンフォニエッタの演奏会にお越し頂きまして誠にありがとうございます。

皆様方の温かいご支援を賜り、私共の演奏会も17回目を迎えることができました。今回は、ヴィオラ独奏にNHK交響楽団の小野富士氏、指揮者には今回で8回目になる藤崎凡氏をお迎えしての演奏会です。この5年間ほど継続してご指導いただいている藤崎氏への私どもからの信頼が大きいことは申すまでもありませんが、小野氏にもザ・シンフォニエッタとは実に12年ほど前からお付き合いいただいており、その音楽に対する姿勢とユーモア溢れるお人柄は、メンバー一同非常に敬愛するところです。

そのようなお二人と一緒に演奏する本日の演奏会、プログラムの前半は、私どもが初めて取り組むイギリスの作品です。耳慣れたドイツ・オーストリアのものとは一味違う雰囲気がありますが、その中でヴィオラ協奏曲という珍しい曲を演奏します。ヴァイオリンと同じ形でありながらヴァイオリンとは全く違う魅力を持ったヴィオラの響きを、小野氏の素晴らしい独奏でお楽しみください。後半の「運命」は、その冒頭があまりにも有名ですが、第1楽章以外の楽章もいろいろな魅力があります。有名でありながらも、全曲を通して聴くということは案外少ないかもしれません。今日の演奏で「運命」の魅力を再認識していただけるよう、しっかり演奏したいと思います。おひとりでも多くの方にご満足頂けますよう心をこめて演奏いたしますので、どうぞ最後までごゆっくりお楽しみ下さい。

末筆になりましたが、私共のために温かい御協力・御支援を下さいました皆様方、また、今回の演奏会を開催するにあたり多大なお力添えをいただいた財団法人日本交響楽振興財団及び日本自転車振興会の皆様に心よりお礼申し上げます。

2003年10月26日

ザ・シンフォニエッタ　代表　　清　永　健　介

Profile

藤崎　凡（ふじさき ぼん）

1957年東京生。慶應義塾大学文学部を卒業後、桐朋学園大学音楽学部にオーケストラ研究生（指揮専攻）として入学。在学中指揮を秋山和慶、小澤征爾、尾高忠明、高階正光、J·フルネの各氏に、ピアノを池田素子氏にそれぞれ師事。1986年3月に同課程を修了。同年宮城フィルハーモニー管弦楽団（現・仙台フィルハーモニー管弦楽団）の指揮者オーディションに合格し、演奏活動を開始。1988年にはアメリカのタングルウッド・ミュージックセンターに留学、L·バーンスタイン、G·マイヤー等のクラスで研鑽を積む。帰国後は創設間もないオーケストラ・アンサンブル金沢に招かれて多くのコンサートを指揮するとともに、新しいオーケストラの基盤づくりに貢献。その後群馬交響楽団と約3年間ほど子供のためのコンサートを行なったほか、2000年までは洗足学園大学、同魚津短期大学の講師も務めた。現在は各地のオーケストラ、オペラ、合唱団に招かれて多くのコンサートを行う一方、各地でクラシック音楽の普及のためのアートマネージメントやコンサートプロデュースにも積極的に取り組んでいる。
http://homepage3.nifty.com/bon-nobuko/

小野　富士（おの ひさし）　Viola

1955年福島市生まれ。3歳からヴァイオリンを始める。
'81年、東京芸術大学音楽学部器楽科ヴィオラ専攻卒業。ヴィオラを加宮令一郎、中塚良昭、ウルリヒ・コッホ、菅沼準二の各氏に師事。
'81年7月から'85年12月まで東京フィルハーモニー交響楽団に副首席ヴィオラ奏者として在籍。
'86年5月、第21回東京国際音楽コンクール弦楽四重奏部門で"斎藤秀雄賞"受賞。
'87年3月NHK交響楽団入団、同年10月から同楽団フォアシュピーラー。
'92年、"モルゴーア・クァルテット"結成に参画。
（東芝EMIより"モルゴーア・クァルテット　ショスタコーヴィチ弦楽四重曲集"vol.1～3、加えて1970年代のブリティッシュロックを弦楽四重奏にした"ディストラクション"を発売中）
'98年1月、モルゴーア・クァルテット・メンバーとして第10回"村松賞"受賞。
ソロ活動としては'82年、'91年、'95年に東京でリサイタルを開催。特に'95年のリサイタルではヒンデミット生誕100年にちなでヒンデミットのみのプログラムを組み、2つの無伴奏ヴィオラソナタと2つのヴィオラとピアノのためのソナタを取り上げ、話題を呼んだ。
'97年5月から2000年8月までの40カ月間に渡り、弦楽専門誌"ストリング"に《おのふじびおらデラックス》を連載。
東京芸術大学非常勤講師として、後進の指導も行っている。

ザ・シンフォニエッタ

結成から18年目を迎えた小編成のアマチュア・オーケストラ。この数年は継続して藤崎凡氏の指導を受けており、そのほかこれまでに山下一史、安永徹、篠崎史紀、小野富士の各氏をはじめとする、素晴らしい音楽家の指導を受けながら、常に演奏の質の向上を目指して一生懸命活動を続けています。月2回の合奏の練習と随時のパート練習を行いながら、8～10カ月の間隔で熊本県立劇場での演奏会を行うほか、スクールコンサート等の活動を行っています。

ザ・シンフォニエッタホームページ　http://www5d.biglobe.ne.jp/~sinfonie

曲目紹介

ディーリアス 「楽園への道」（歌劇「村のロメオとジュリエット」より）

ディーリアスの第4作目のオペラ「村のロメオとジュリエット」。（作曲：1900〜01年、プロローグ付3幕第6場）。互いに愛し合う村の少年サリーと少女ヴレーンヘンは、激しく対立する両家のはざまで、この世では結ばれぬと思い込み、小船に乗って死の道を選ぶという、スイスの田園を背景とした哀しい話である。1907年のドイツ語による初演の後、英国では1910年2月22日、トーマス・ビーチャムの指揮によって、コヴェント・ガーデン王立歌劇場において行われた。「楽園への道」は英国初演の後、ビーチャムの薦めでオペラ終幕の前に演奏された間奏曲を基に書き改められた「インテルメッツォ」で、作曲年代は1914〜15年と推定されている。

ウォルトン　ヴィオラ協奏曲

指揮者トーマス・ビーチャムからヴィオラの名手ライオネル・ターティスのために協奏曲を、と勧められたウォルトンは、本人の同意も得ないまま、1929年、書き上げた手書きスコアを直接ターティスに送る。しかし、彼から演奏不能として送り返される結果となり、BBCの音楽部長がヒンデミットなら演奏してくれるだろうと交渉の末、1929年10月3日、ロンドンのクィーンズ・ホールで、ヴィオラ独奏パウル・ヒンデミット、指揮ウォルトン、ヘンリー・ウッド交響楽団によって初演された。ターティスも聴きに来ていて、演奏不能といって断った自分の不明を恥じ、その後進んで演奏し、SP盤に初録音したほどである。

第1楽章　アンダンテ・コモド

ソナタ形式。弱音器を付けたヴィオラ、第1ヴァイオリンとクラリネットの低音域による暗い導入部が用意され、独奏ヴィオラがカンタービレ・エスプレッシーヴォの第1主題で入っていき、次第にその熱情的な性格を高めていく。展開部では、まず第1主題が取り上げられ、非常に短いトゥッティの後、曲の速度がゆるみ、独奏ヴィオラが重音奏法で第2主題を扱い始める。

第2楽章　ヴィーヴォ・コン・モルト・プレチーソ

スケルツォ風ロンド。が、単純なロンド形式に従ってはいない。独奏ヴィオラがこの楽章の主題要素である第1主題を呈示。第2主題は、弱音器を付けた金管楽器によってジャズ風のリズムが示される。

第3楽章　アレグロ・モデラート

ファゴットの独奏が非常にドライな感じの第1主題を呈示する。独奏ヴィオラは、第1主題の5度高い旋律を奏で、クライマックスへ持ち込んでいき、展開部は伝統的で、模倣、フーガ及び主題の拡大などが用いられる。コーダは静かで高遠な広がりを見せ、去りがたい余情を残しつつ徐々に消えていく。

ベートーヴェン　交響曲第5番　ハ短調作品67

完成は1807年末か、1808年初め。初演は1808年12月22日、アン・デア・ウィーン劇場でベートーヴェン自身の指揮で行われた。「かく運命が戸をたたく」とベートーヴェン自身が説明した、と弟子シントラーによって伝えられて以来、「運命」という真に劇的な題で呼ばれ、その人気を高める大きな原因をなしているようである。この「タタタターン」という動機は何もベートーヴェンが発明したものではなく、既にハイドンやモーツァルトが使っている。しかし、それが実に見事な計算によって全曲を通しての中心とされて、完璧な構成を示すことになっており、それが劇的な壮大な音の広がりとなって、万人を等しく感激させる。

第1楽章　アレグロ・コン・ブリオ

ソナタ形式。クラリネットと弦楽合奏がユニゾン（同じ音）で動機「タタタターン」を激しく叩きつけ、このリズム形は全曲を無限に貫いていく。第2主題は決然たるホルンの独奏後、ヴァイオリンがやさしく歌いだし、木管楽器に受け継がれる。展開部は最初の動機が綿密なる計算のもとに構成発展されるところであり、作曲者の思うままに翻弄され続ける。ほとんど呈示部どおりの再現部の後、比較的長いコーダが続き、次の楽章に期待を持たせる雄大な締めくくりとなっている。

第2楽章　アンダンテ・コン・モート

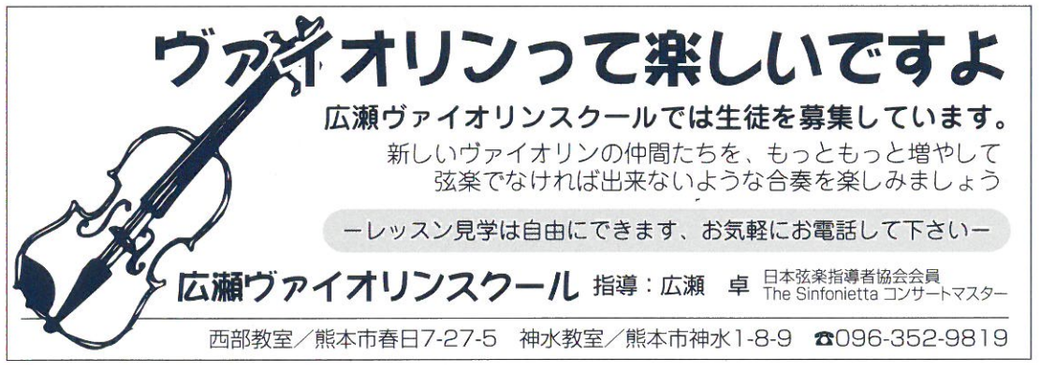
自由な変奏曲。主題はとても美しく瞑想的で、ヴィオラとチェロが緩やかに揺れ動いて歌いだし、それを弦楽器群が、次に木管楽器が受け答えていく。その後、クラリネット、ファゴットが新しい対旋律を導き出し、これを全合奏で力強く受け突き進んでいく。コーダは瞑想的に始まりこの楽章を決断的に終わらせる。

第3楽章　アレグロ

スケルツォ。チェロとコントラバスが大きな体を不器用にかがめるように登場。それをヴァイオリンが引き上げ、その繰り返しの後、いきなりホルンが第1楽章冒頭の動機を強奏。トリオ部はまたチェロとコントラバスで「象が喜んで踊っている」（ベルリオーズ）ように奏で、主題を各楽器がフーガ風に演奏。再びスケルツォに戻り、終楽章へと、、。

第4楽章　アレグロ

ソナタ形式。第3楽章からの移行部はppになって期待と緊張を高め、クレシェンドで膨れあがり、全合奏でffの雄大な凱歌をたっぷりと堂々と奏し始める。この上向的な主題に対してヴァイオリンによる第2主題は、明るさの中に下向的な性格を持つ。展開部は第2主題が中心となり、クライマックスに達したところで、突如、冒頭の動機が入ってきてスケルツォの回想が行われる。こういったこともこの交響曲の新しい試みの一つと言える。再現部の後、ファゴットによる新しい主題が呈示され、コーダへ。そしてこれが、入念に伸ばされプレストとなり、これでもかこれでもかと、くどく終止の和音を叩き名残惜しくもこの曲を終わる。



小野富士氏との会話より

＞ヴィオラを始められたきっかけは？

僕は最初は大学の電気工学科というところに入ったんですが、3歳から遊びでヴァイオリンをやっていたんですよ。アマチュアでヴァイオリンをやりながら、真面目に電気工学を勉強しようと思ったんですが、2年生のときに実験が始まって、やってみたら自分は全然興味がわかない事が分かって、こんなこと卒業して40年もやれるとは思えないなと思って。そのころクァルテットのヴィオラがとっても好きだったんです。スメタナ弦楽四重奏団の。僕にとって青春のクァルテット。ある人に相談したらヴィオラだったらなんとかなるかもしれないと言われて。で、そういうことをもあって、ヴィオラはもちろんやりますといいました。それから親父に「勘当されてもいいから自分は音楽家になります」と手紙を書いたら、親父がやさしくて「せっかく入った学校だから、あと2年やって卒業しろ、そしてその間に準備して、もし学費の安い芸大に入れたら援助してやってもいい」と言われた。そういうことがあって、なんとか滑り込みセーフとなってヴィオラをやっています。6歳下に弟がいるんですが、その弟もなぜか今N響のヴィオラ奏者をやっています。

ヴィオラをやってて今とても幸せなことがあって、1992年の秋に結成した「モルゴーア・クァルテット」です。「ショスタコーヴィチが残した弦楽四重奏曲を全部やろう」と始めて、2001年1月の定期演奏会で15曲全部を演奏し終わり、今度はショスタコーヴィチばかり3曲ずつの演奏会をやってて、それもこの12月には終了します。今回、僕はこちらでウォルトンの協奏曲を独奏者として弾かせてもらうわけですが、その演奏の中には多分たくさんモルゴーア・クァルテットで研究したり経験したりして来たアイディアが入ってると思います。ヴィオラの曲ってすごく少ないんですが、弦楽四重奏というのは、ピアノやヴァイオリンと比べても遜色ない程ありますし、作曲家が本気で書いてる曲が多いので、それを少しでも経験できるのは幸せなことです。この演奏会の次の日に「モルゴーア・クァルテット」が始めて九州で演奏します。北九州国際音楽祭に呼ばれて、前半にハイドンの「皇帝」とベートーヴェンの最後の四重奏曲をやって、後半はピアノの若林顕さんとショスタコーヴィチのピアノ五重奏を演奏します。10月26日の演奏会を聞いて興味を持たれた方は、是非次の日、北九州の「響ホール」にもいらして下さい。

＞ウォルトンのそれぞれの楽章の特徴を

1楽章は叙情的なメロディで始まる。その美しいメロディから「人生いろいろ」みたいに発展します。

2楽章はスケルッツォですね。変拍子があったり、ちょっと刺激的な音形があったり。

＞スケルッツォって分かりやすく言うと？

直接訳すと「諧謔曲（かいぎゃくきょく）」。余計わかんなくなっちゃった？。簡単に言うとぴょこぴょこ遊んでいるんですよ。楽しかったり、がちゃがちゃしたり。だからしっとりしてはいけないんです。非常にエネルギッシュでシャカシャカしているっていうか。

で、3楽章。変な話ですが、音楽大学の学生って、この曲は試験の時間の都合で1、2楽章しか弾かない。3楽章っていうのは最初にファゴットから始まるんだけど、とても単純なテーマからできていて、だけどウォルトンはものすごく凝って、作曲のテクニックをそこにたくさん盛り込んで、そして最後はあたかもセザール・フランク（フランスの作曲家・循環形式を確立）のように、第1楽章のテーマを最後に持って来て終わる。3楽章はオーケストラとしてもとても楽しいし、決して2楽章で終わったと思わないでください！（笑）3楽章はじっくりと聴いてほしい。

＞小野さんにおけるヴィオラの魅力

（ヴァイオリンコンチェルトに比べるとヴィオラコンチェルトは珍しいので・・・）

ヴィオラという楽器はこのごろは皇太子殿下が弾かれることで少し市民権を獲得しつつありますが、まだまだマイナーな楽器で、しかもヴィオラという楽器のコンチェルトはますます少ない。

最初にヴィオラコンチェルトを作ったのは有名な「テレマン」という人で、この曲は独奏と弦楽合奏のためのものです。今回演奏するウォルトンのものは大きなオーケストラでできるコンチェルトで、しかもヴィオラらしい音も聴いてもらって、オーケストラとしても退屈しないという曲を選びました。今回演奏するウォルトンの協奏曲の初演の独奏はパウル・ヒンデミット（ドイツの作曲家・ヴィオラ奏者）がイギリスで行ったんですが、予定の演奏会の直前にイギリスの王様が亡くなったんですよ。それで半日くらいBBCのスタジオにこもって「葬送の音楽」を作曲して演奏してそれをラジオで放送した。そしてその後ウォルトンの初演をやった。それを聴いたかどうか知らないけれどウィリアム・プリムローズという20世紀最大のヴィオラ奏者が、バルトークに「ウォルトンのヴィオラコンチェルトみたいなのを書いてほしい」とお願いしたんです。バルトークはアメリカに渡ってあれこれ苦労したんですが、曲のスケッチを書いて、「あとはオーケストレーションのみで、時間の問題だ」という手紙を遺して死んでしまう。それでバルトークの弟子とプリムローズが、そのスケッチから今あるヴィオラコンチェルトを完成させたんです。

この2曲を比べると、ウォルトンの作品はイギリスという感じが出ていて、都会的なところがあって、オーケストラも伴奏だけするわけではない。ヴィオラの魅力は中音域なのですが、高音域でも美しいメロディが出てきます。本番はそこら辺を楽しみに聴いていただければと思います。

（9月14日夜　熊本市内にて）

藤崎凡氏との会話より

＞指揮者になられた動機、きっかけは？

最初に指揮をしたのは高校生の時です。高校にオーケストラがあって、3年生が誰か指揮をやるんです。で、面白そうだなと思ってやって。ドヴォルザークの8番の交響曲をやりました。生意気ですよね、高校生でね。それでも音大を受験するなんてことは考えないで、文学部に入学したんです。そうしているうちに、一回は音楽大学を受験してみようかなと思って。それで、拾われたからこういうことになったわけです。（笑）

＞ヴィオラの小野さんも一度大学を卒業した後に・・

あの当時はそういう人がたくさんいたんですよ。普通の学校に通っているのに音大に行く人たち。でも、どうしてやりたかったのかという質問に答えるのは難しいんですよ。きっと憧れていたんでしょうね。憧れって言うのは、全然音楽を知らない人が指揮者を見てカッコいいなと思う程度のものです。誰かが演奏しているのを聴いて、「俺だったらこんなことはやらないのに」と思うとかそういうのじゃないです。特定の誰かに憧れてたとかいうことはないですね。でも、あった方がいいですね。志すならば。

＞今回の曲について：1曲目ディーリアスはあまりなじみがない作曲家ですよね。

イギリスの作曲家を十把一絡げにウォルトン、エルガー、ディーリアスというけれど、イギリス臭さっていうのはイギリス人でないディーリアスが一番ですね。ディーリアスは血筋からいうとドイツ人の血が混じっていて、で、放浪癖のある人で。たまに曲書いて、お金があるなと思ったらフラフラとどこかに出て行って、・・そんな人だったらしいですね。

たまたまこの前、僕の師匠の尾高忠明が日本フィルの定期演奏会でイギリスのものばかりやったんですよ。その練習を見せてもらいに行っていろんな話を聞かせてもらったんですけど、イギリスの音楽って何かというときに、これは僕の師匠が昔言っていたことなんだけど、どうしても我々はドイツ音楽をやる機会が多いでしょ。おまけにロマン派のものが多い。そうなると、思いっきりビブラート

壱之倉庫
弐ノ弐
さくらさくら
YOKOBACHI

熊本上通
路地裏界隈
遊・楽・歩・食
酒・肴・飯・菜

各種パーティー、忘・新年会の
ご予約を承っております。

HAL
洋食屋
TE-TSU
営業時間／
午前11:30－午後 3:00
午後 5:00－午後11:00
（オーダーストップ）

レストラン
TETSU
K-toku Side
慶徳再度店
営業時間／
午前11:30－午後 2:00
午後 6:00－午後10:00
（オーダーストップ）

店休日：各週月曜日（祝祭日を除く）

出演者名簿

■コンサートマスター
清永健介
廣瀬　卓

■第1ヴァイオリン
大宮伸二
岡本侑子
定永明子
瀬畑健雄
東家容子
山下純子
山田容之

■第2ヴァイオリン
浦中有紀
清永育美
丁　睦美
中澤康子
中島悦子
古市敬子
山口祐子

■ヴィオラ
和泉希代子
太田由美子
城野加代子
田代典子
辰野陽子 ※
奈須慎也 ※

■チェロ
石垣博志 ※
関　栄
瀬畑むつみ
東家隆典
松本幸二

■コントラバス
桑原寿哉 ※
歳田和彦
中川裕司 ※

■フルート・ピッコロ
泉　由貴子
田島公敏
中澤邦男

■オーボエ
石田栄理子 ※
橘　徹

■イングリッシュホルン
吉田千草 ※

■クラリネット・
バスクラリネット
岡村クミ
府高明子

■ファゴット
柴田義浩
星出和裕

■コントラファゴット
蓮沼　昇 ※

■ホルン
伊藤友美
奥羽朋子 ※
川崎華奈
田中禎子 ※

■トランペット
出口文教
福島敏和

■トロンボーン
佐藤奈々絵 ※
寺本昌弘 ※
右田順二 ※

■ティンパニ
福島　好 ※

■ハープ
矢澤みさ子 ※

※は賛助出演

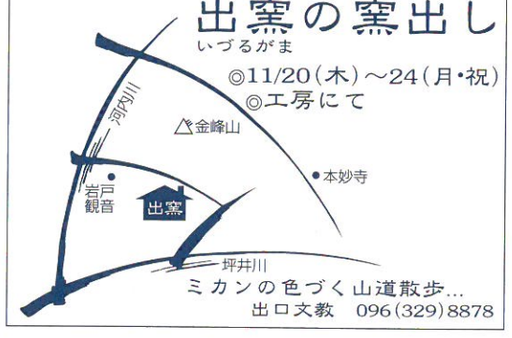
今年こそ何か始めたい方へ

この10月よりウェルフェア大谷
改め大谷楽器　大江教室がリニ
ューアルオープン!!
カルチャースクール（音楽・ダ
ンス・アート・各種講座）が51コ
ースに増えさらに内容充実!!

無料体験
レッスンも
随時実施!

お問合せ
大谷楽器 大江教室 電話 096(211)5405

出窯の窯出し
いづるがま
◎11/20（木）～24（月・祝）
◎工房にて



ミカンの色づく山道散歩…
出口文教　096(329)8878